

村上春樹の「ビルドゥングスロマン」とその登場人物について

トマーシュ・ユルコビチ*

村上春樹の長編小説における女性登場人物と「謎の女」

村上春樹の小説に登場する人物をみると、特に女性が頻繁に出てきて、大切な役割を満たす。その女性人物の一つの典型的なタイプを、ここで「謎の女」と呼ぶ。

村上の小説においては、語り手あるいは主人公からみても「謎の女」は、魅力を持っているわけだが、同時に、彼女の過去については、昔ある種の惨事があったということ以外、ほとんどなにも描かれていない。そうした乏しい描写の結果として、彼女達は小説の主人公に対しても読者に対しても、想像力を刺激することになる。それでは、この繰り返して登場する「謎の女」を、象徴として読めることはできるだろうか。また、読めるなら、その解釈はどうなるのだろうか。

長編小説の「謎の女」とその進展

「謎の女」を村上春樹の長編小説という枠組みで解釈してみたい。その進展を詳しく観察すると、基本的にその進展には「予備期」、「ピーク期」と「最終期」という三つの特別な段階が見受けられる。

予備期は処女作の『風の歌を聴け』から第四作目の『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』までが相当すると考えてもいいだろう。

ここでは典型的な「謎の女」がまだ登場していないが、「謎の女」に近い人物といえる女性人物はいくつか登場する。

「ピーク期」の「謎の女」には、典型的な全ての特徴が備わっている。また、主人公にとっては、彼女達に会うことが、決定的な出来事となる。ピーク期の「謎の女」の典型的な例をあげれば、まず、『ノルウェイの森』における直子、『国境の南、太陽の西』の島本さん、『スプートニクの恋人』に登場した韓国人のミュウなどがある。

さて、ピーク期において、まさに実際のピークとなった作品として『海辺のカフカ』を取り上げたい。『海辺のカフカ』は、典型的な「謎の女」が登場した村上春樹、最後の長編小説となる。しかし、『海辺のカフカ』における「謎の女」は「昔きつときれいであった女」とのみ描写されていて、小説の中では、悲劇的ではない自然なかたちで最後を迎える。

そして、「最終期」に入って以降、以前のような「謎の女」は、登場しなくなる。『アフターダーク』にも、新作『1Q84』にも、もう「謎の女」に類似した人物は見つけ出すことはできない。

「謎の女」とその読み方

では、ピーク期の「謎の女」の解釈において、重要な鍵となるのは、ユングの元型（アーケタイプ）であると考えられる。つまり、「謎の女」をユングの元型の一つとして考えれば、かなり興味深い解釈ができる。確かに、ユングの元型そのものも、

*カレル大学大学院院生

謎めいた雰囲気を漂わせて、解釈が難しいという点で、「謎の女」と明らかに共通している。

このユングの元型は、分析心理学で使われていて、男性と女性の人生の段階を象徴する理念だと考えられる。もし、村上の「謎の女」が実際に元型的な人物であるすれば、それは、人生のどのような段階を表しているのだろうか。それを解釈するために、ここでは、できるだけ典型的な「謎の女」を選ぼう。それは、『ノルウェイの森』の直子に違いない。

まず、直子は人生のどのような段階を象徴しているのかを考えてみたい。直子は小説において、非常に曖昧に描写されてはいても、作品中の尚子が人生のどの段階を表しているのかという情報は、村上はなかなか細かく説明している。例えば、小説のプロットの展開において一番重要な場面として、直子の二十歳の誕生日お祝いの場面がある。日本人にとっては、二十歳の誕生日は、法律的に大人になる日である。そのことに対して、直子は以下のように反応する：

「二十歳になるなんてなんだか馬鹿みたいだわ」と直子が言った。「私、二十歳になる準備なんて全然できてないのよ。変な気分。なんだかうしろから無理に押し出されちゃったみたいね」（『ノルウェイの森』71ページ）

直子は大人の寸前で、あまり大人になるつもりはないようである。直子は、ここで、二つの世界の境で停止していて、どちらの方向に進むのか迷っている人物として存在している。その「二つの世界」の一つは、過去であって、もう一方は未来である。直子は、その過去と未来の間にあった境を精神的に超えることができなくなり、結局、「永遠に21歳」のままで、自殺してしまう。こうした小説中の彼女の謎めいた行為と雰囲気は、彼女が「大人の壁」を超えなくなったことを表しているに違いない。分析心理学では、こうした精神状態を、ラテン語で *puer aeternus* または *puella aeterna*（永遠の少年、永遠の少女）という。直子

の精神状態を指すにあたってなかなか似合った専門用語である。

他の村上作品でも「謎の女」を同じように解釈してみれば、結果は明らかである。つまり、その人物の謎めいた雰囲気と行動とは、成長できなかった、あるいは成長を拒否したことに起因していると言える。

「謎の女」が登場する小説の基本的な構造

「謎の女」の登場する小説のプロットで繰り返して出てくるものは、「永遠の少女」という元型だけではなく、それに関連したものも存在する。そのようなものを、統一した構造として読むことが可能である。その構造を簡単なストーリーで表現してみれば、以下のようなものになる。

主人公が「謎の女」に会って、彼女と恋に落ちる。自分がこの感情も展望のひらけない「愛情」もとても悲劇的に感じていて、止めるつもりがどうしてもできない。その「謎の女」も、自分の欲望もあきらめて消しざることができない。その結果として、責任をとらなければならないわけです。苦しんで、問題を抱えた現実の世界を受け取らなければならない。

こうして、成長することを拒否する「謎の女」は、主人公にとって超えなければならないある種の「壁」または、「危険」を、仏教で言えば「欲望」を象徴する存在として見ることができる。また、分析心理学の視点から見れば、主人公は、問題を積極的に解決しながら成長することの元型の代表者である。もし、謎の女を「永遠の少女」と称したら、主人公を逆に「英雄」という元型として考えられるのではないか。

以上のことより、村上の書いている「謎の女」の登場した小説を、主人公の成長をテーマにしたビルドゥングスロマンとして定義することができると思う。

「謎の女」小説の構造の詳細

暴力的な「父の代表者」

また、「英雄」の元型を象徴している主人公には、「永遠の少女」の影響をとりのぞいても、ほかに越えなければならない問題が残っている。主人公は、周囲の男性登場人物がもたらした自分への「影響」を越えなければならない。その「影響」とは、「暴力」、または、「父の陰」として表現できると考える。時間的に見れば、長編小説中、主人公の周りには、かなりの権力をもって様々な種類の暴力をあたえる男性人物が徐々に増えてくる。こういう「父の陰」は村上の小説の中で、日本の政治や歴史に潜在する諸問題の代表者として解釈できると思われる。村上春樹の「ビルドゥングスロマン」の主人公は、その男性と対決して、自分のアイデンティティを確立する。

思うに、評論家によって、「自分の周囲の出来事に興味を持たない」として批判された村上の主人公たちは、実際に、日本の父権性、利権や政治性に対して、かなり強い批判を象徴する人物として解釈することができるのではないだろうか。

現実の世界を代表する人物

「謎の女」の小説で登場する典型的な人物の最後のグループは、現実の世界を代表する（女性）人物である。この人物は、「永遠の少女」の対極的な存在であり、主人公を現実の世界に引き戻し固定させる役割をもつ。代表的な例をあげれば、『ノルウェイの森』の緑さんがそうである。

以上の分析から「謎の女」の登場する小説の基本的な構造として、以下のようなパターンが導かれる。

英雄→永遠の少女+暴力→成長／現実の世界

主人公は、欲望と暴力の壁を越えて、成長するのである。

「永遠の少女」で母なる物？

しかし、「永遠の少女」にも、母のようなところが全くないという訳ではない。『スポーツニクの恋人』のミュウという「謎の女」が、すみれという主人公の心をなぜそれほど強く惹きつけるのかを考えてみると、すみれが心の中でミュウに憧れながら、自分の失った母親をそこにしているという可能性を無視することはできない。また、『海辺のカフカ』の「謎の女」である佐伯さんも、カフカ少年が彼女に強く惹かれる理由は、心の中で彼女を自分の失った母親にしたいからだと解釈することができる。このような可能性を考慮し、上で示したパターンを少々改めると次のようになるだろう。

英雄→永遠少女／マザコン+暴力／父権性
→ 成長／現実

主人公は、マザコンと父権性を超えて、成長する、あるいは、主人公が両親の影響を超えて、成長する、ということになるだろう。

まとめ

「謎の女」が現れる村上春樹の長編小説中において、登場する二つのタイプの女性を、主人公の成長する過程の二つの段階に位置づけた。主人公は、自分の思春期を後にしながら、大人の人生にむかうことの象徴として解釈することができる。

繰り返して登場する主人公の成長話によって、村上春樹は日本社会が抱える問題を指摘し、批判する。そして、その主人公はマザコンと父権性の暴力を小説の中で幾度となく越えなければならないのである。

登場人物一覧表

長編小説	英雄	永遠少女	父権制・暴力の代表者	現実の世界
ノルウェイの森	渡辺とおる	直子	長沢さん	緑
国境の南、太陽の西	はじめ君	島本	義父	妻の有紀子
(ねじまき鳥クロニクル)	岡田とおる	(マルタ加納, クレタ加納)	綿谷のぼる	妻の久美子
(スプートニクの恋人)	すみれ	ミュウ	X	ぼく
海辺のカフカ	田村カフカ	佐伯さん	カフカの父/ Johnie Walker	(さくら)
アフターダーク	浅井マリ	浅井エリ	白川	高橋くん、薫さん